

「現代の四国遍路に見る多様性」

総合政策学部政策科学科 4年 松田大輔

2016年秋、私は四国を巡礼するお遍路さんのひとりとなった。1,200年以上にわたって続いてきた四国遍路の特徴を探りたいと考えたのである。当初は聖と俗といった四国遍路の「二面性」に注目していたが、寺院の観察やお遍路さんへのインタビューを進めていくにつれて、だんだんと四国遍路の「多様性」について考察するようになった。

寺院の観察でも多様性を感じるが多かった。八十八カ寺には、いかにも仏教的な建築様式の寺だけでなく、竜宮城をイメージして建てられたものだったり、西洋風の近代建築だったり、さまざまな寺院が建立されていた。

また、へんろ道の観察では、四国遍路の歴史の長さを体感することになった。江戸時代に建てられた遍路標識に道を教えてもらったり、かつて身寄りがなく行き倒れたお遍路さんのへんろ墓に手を合わせたり、へんろ道には歴史の層が幾重にも重なり合っているように感じられた。

特に多様性について考えさせられたのは、お遍路さんに対するインタビューの結果である。歩きながら、休憩しながら、宿の待合所で、など、インフォーマルなかたちで計83組の方々に話を聞くことができた。毎回お遍路さんには、①出身地、②遍路をする目的を聞くようにしていた。

お遍路さんの出身地は四国やその周辺地域が比較的多い結果となったが、それに劣らず、関東、中部、あるいは海外からの巡礼者もたくさんいることに気づかされた。交通の便が発達し、グローバルな環境が醸成されていることにその一因があると推測できる。

遍路をする目的は、旅行・観光をはじめ、祈願、供養、修行、その他など、非常に多岐にわたっている。なかでも注目したいのは、「特になし」と答えた人々である。明確なはっきりとした理由があるわけではなく、気づいたらなんとなくお遍路さんになっていたというものである。旅行・観光の次に多かったのが、この「特になし」の人々であった。ここから四国遍路という場が、特定の目的を持った人々にだけ解放されているのではなく、基本的には誰に対してもオープンな性質を持っていることが指摘できる。目的が不明確でも、旅行・観光のためであっても、あるいは他宗教を信仰していたとしても、四国遍路という場はそのすべての人々を包みこむことができるのだ。

私は2016年10月4日から歩き始め、11月4日に結願することができた。歩いていた32日間、ほんとうにたくさんの人に支えてもらったと思う。地元の人々のお接待、ところどころで出会ったお遍路さん、そうした数々の支えがあって、はじめて道を歩き続けることができた。また、四国の自然の豊かさにも支えられていたと思う。焼山寺への深い山、室戸岬への大きな海、足摺岬での朝日、久万高原の澄んだ空気……。四国遍路は1200キロを超える大変な道のりだが、道中楽しさを感じる場面は多々あった。そうした要素もお遍路が1200年以上にわたって続いてきた一つの要因であるかもしれない。